

〔6月のことば〕

花泥(はなどろ)が流れる季節

農林省農事試験場長

川井 一之

六月ともなれば、瀬戸内海の因島(広島県)あたりの島嶼部は、ときならぬ春雪のシトネを着た島島が、コバルト色の海上に浮ぶように、除虫菊の美しい花の季節の訪れとなる。おそらく、コンビナート企業がふりまく公害に、身も心もおかされている人々に、この美しい景観は一抹の爽やかさと安らぎとを与えていることだろう。

今日の合成化学万能時代にも、なお天然ピレトリンの良さを守るように、六、七百町歩ばかりの除虫菊が、耕して天に到る(我々は耕して貧困に到ると呼んでいた)段々畑に乱れ咲き、そこで昔から千歯こきで、花を収穫しているであろう農業者の姿が目に見え。

平均四、五反という零細な、急傾斜地の畑作経営にとっては、平坦地から山頂にいたるまで、これほど、あまねく現金収入の潤いをもたらした商品作物は、かつてなかったといってもよい。

今日のような環境時代には、天然ピレトリンとしての価値もさることながら、それ以上に、美しい景観の恩恵をあたえる環境保全的価値が、ふたたび見直される必要があるだろう。その地帯に棲む住民にとっても、また近くを旅する多くの人たちにとっても、この自然のもつ無限の価値は、きわめて貴重な資源であり、共有の財産であると思われる。なにか適切な環境行政としての措置が、とられることを望みたい。

ところで、この急傾斜地の畑作では、土を大切にす、つまり地力を大事に保全するところの、手鋤きという耕具による技術的慣行が、伝統として残されていた。

「花泥(はなどろ)が流れる」という古老のコトバに、土を愛する切実な感じがにじみ出ていることを、印象づけられたものであった。

花崗岩の風化した段々畑の土壌は、いわゆる受蝕性が大きくて、ちょっと大雨が降ると、エロージョン(土壌侵蝕)が起きて、いちじるしく大量の土壌が流出する。

とくに海藻(もば)のたばをトギリオークという棒で突き刺して、汗だくで山頂まで運び上げて、丹精して肥沃にした土壌が、梅雨や台風期には、山からガリー侵蝕でできた谷へ、そして河口から遙か沖合いに出て海の色を黄色くにごらすほど、大量の沃土が流されていく。土を愛する農業者の悲嘆には、はかり知れないものがある。

「花泥が流れる。」というこの島の古老のコトバのなかには、このような怨念の響きがこめられていたわけだ。かつて、急傾斜地の土壌侵蝕と土壌保全の調査研究で、これらの島々を八年間調査して歩き廻ったことがあった。

あの頃から十数年が経過した今日では、これらの急傾斜畑はどんどん放棄され、荒蕪地と化し、段々畑で働く農業者の姿がしだいに影を消して、こんどは土に代って人間が内海工業コンビナート地帯に、どんどん流出している時代になってきているのであろう。想えば、無量の感に胸がいたむさいきん、畑地といわず水田までも、堆厩肥が入らず、多肥料・多農薬の影響に加速されて、土が死んできているという声が、全国的に聞かれるようになってきた。これには、農業者の生産意欲を減退させた社会経済的な問題が、基本的に影響しているが、さいきん食糧の世界的窮迫見通しが強くなってきたことをあわせ考えると、技術的にも行政的事業としても、この農業の最も大事な基盤をなす土を守る運動を、なんとかして全国的に盛り上げる必要性があることを痛感する。

かつて広島県の奥深い山村で、酪農ひとすじに生きてきた一人の農婦が、歌集がその年の農民文学賞を得たよろこびを託して、こんな歌を送ってきたことがあった。

うつむきて堆肥を負えば足もとの
蟻の歩みとわれの歩みと
何時果つるこの労働を思うとき

とじし眼より泪流るる

土に生きる婦人としての苦しみと怒りを、赤裸裸に訴えたものだが、私は一研究者として、この歌を受けとったとき、激しい衝撃をうけたことを想い出す。

農業技術研究者諸君。ぜひ新しい、人間解放的な土を守る技術を、すみやかに開発せられんことを。